

「新出洛中洛外図屏風（和子入内） 制作時期をめぐって」

狩野博幸（同志社大学）

「洛中洛外図屏風」が16世紀以降のわが国風俗画の母胎をなしたことはよく知られている。ことに“時世粧”を描く風俗画の性格上、その制作年代を探索する試みが、不断に続けられて来た。そのときに指針となるのが、図中に描かれた社寺や邸宅から景観の年代を推定する作業であったが、黒田日出男氏によって狩野永徳筆「洛中洛外図屏風」が永禄8年（1565）の9月3日に完成したものであることが検証されたことは、まさしく瞠目すべきことであった。すなわち当該のいわゆる上杉家本「洛中洛外図屏風」が永徳23歳の作と判明したことの愕きはもとより、田中喜作・武田恒夫・辻惟雄の各氏がその景観年代の下限を永禄6年ないし7年に設定しておられたことも、今さらながら感に堪えないところである。

「洛中洛外図屏風」研究の要点は、ひっきょう、景観年代と制作年代をどれだけせばめてゆくことができるかということに尽きよう。

今回俎上に載せる「洛中洛外図屏風」はいわゆる「第2期の定型」、つまり二条城出現以降のそれであるが、両隻にわたる主題が元和6年（1620）6月18日の徳川和子の入内の光景であることによって異彩を放つ。歴史的に著名な京都のページェントとして、後陽成天皇聚楽行幸、後水尾天皇二条行幸があり、遺作もあるが、和子入内を描いた「洛中洛外図屏風」は本作が現存唯一である。しかも景観年代と制作年代が著るしくせばまる作品でもある。

今回の発表では、その全体のみならず細部を紹介することによって、新知見とともに、「洛中洛外図屏風」の歴史的意義と美術史的意義を改めて探ってみたい。